

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00121

研究課題名（和文）国際的な比較を踏まえた日本演劇とメディアをめぐる総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research on Japanese theater and media based on international comparisons

研究代表者

児玉 竜一（Kodama, Ryuichi）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：10277783

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）： コロナ禍の影響を蒙り、海外渡航やアルバイトの目算は大いに縮小したが、インターネット上の情報収集等により、いくつかの研究対象を新たに認識した。

具体的な成果としては、新発見の「林又一郎旧蔵フィルム」の詳細解明、学会および国立映画アーカイブでの上映会に際しての成果還元。海外演劇の古録音収集により、日本の芸能音源資料との比較研究への足がかりを得たこと。英語歌舞伎上演に参画して、歴史的な経緯を遡ることで、文化研究と地域研究と芸術研究とが交錯する新たな研究領域を認識したこと。演劇研究における絵画や写真、映像の活用について、英国との対話を通して知見を深めたこと、などが挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「林又一郎旧蔵フィルム」の詳細解明は、映像、音声、演劇雑誌、演劇台本など、演劇に関わる様々な資料に関する知見を総合集大成した形で、国立映画アーカイブ上映会に参集した一般観客に対して、学術成果を還元する働きをなした。同様に国立映画アーカイブでの招聘公演「歌舞伎役者としての澤村四郎五郎」においても、演劇資料を駆使することで、映画との関係性を浮き彫りにして、学術成果を一般に還元した。

その他、英語歌舞伎および在外歌舞伎の研究は、今後の大きな課題として隣接諸分野を巻き込む新領域を想起させた。いずれも、演劇研究に端を発して、文化交流、地域研究など、諸分野との関係を密接なものとした。

研究成果の概要（英文）： Although the Corona disaster has greatly reduced our prospects for overseas travel and part-time work, I have newly recognized several research subjects by gathering information on the Internet.

Specific achievements include the detailed clarification of the newly discovered "Hayashi Mataichiro's film collection" and the return of the results to the academic conference and the screening at the National Film Archive. The collection of old recordings of foreign plays has provided a foothold for comparative research with Japanese performing arts source materials. Participating in an English-language Kabuki performance, and recognizing a new research area at the intersection of cultural studies, regional studies, and artistic studies by tracing back the historical background. Through dialogue with the British, I have deepened my knowledge of the use of painting, photography, and film in theater research.

研究分野：日本演劇研究

キーワード：歌舞伎 演劇雑誌 演劇資料

1. 研究開始当初の背景

演劇が上演とともに消え去る運命にあることは言うまでもないが、多くの観客を擁した大劇場の演劇は、写真や劇評による記録という面においては、まだしも恵まれた位置にある。とはいえ、今から70年近く前から今日に至る演劇の、画像・音声・動画などが、どこにどのように残されていて、どう使えるかといった、いわば演劇のメディアリテラシーは、その取り扱いに習熟した者には知られているものの、専門領域がわずかに外れると、まったくわからないという状況にある。本研究はその状況を、ジャンル横断的な網羅化によって打開し、蓄積を広く一般に紹介し、それらのアーカイブ的な効能を知らしめる方法を模索するものである。

2. 研究の目的

画像・音声・動画などの演劇資料について、ジャンル横断的な網羅化によって、それによって何がわかるかという蓄積を広く一般に紹介し、それらのアーカイブ的な効能を知らしめる方法を模索するものである。

そのため、演劇雑誌のアーカイブ的な蓄積と、総目次作成による検索機能の充実をめざす。演劇関係動画の所蔵を調査探索し、その利用方法についての検討をおこなう。それによって、今後、こうした演劇メディアを実践的に活用して、どのような研究領域を切り拓くことができるかを展望することをめざしたい。

3. 研究の方法

演劇雑誌をその創刊から終刊まで、書誌的な調査をおこない、総目次作成のための整理をおこなう。また、その際に海外における演劇雑誌との比較研究を基として、彼我の演劇雑誌のあり方についての知見を深める。演劇に関する映像の所在を博捜して、発掘・整理をおこなう。年代別に整理をおこなうとともに、新出映像の来歴、内容調査と同定をおこない、その演劇史的な価値を見定める。この調査過程には、演劇雑誌や画像によって蓄積された知見が総動員される形となる。

また、これら演劇と関わるメディアに対するリテラシーを確立して、どのような情報を資料から読みとるか、といった点をめぐって、隣接するジャンルの研究や、異なる地域の演劇研究との対話や比較をこころみる。

4. 研究成果

本研究期間は、コロナ禍の影響を最も直接的に蒙った時期にあたり、海外への渡航はまったく予定が立たないことになってしまったので、「国際的な比較を通して」という点については、当初の目標よりかなり縮小を余儀なくされた。また、アルバイトを動員しての作業といった点でも規模は縮小せざるをえなかったため、演劇雑誌の総目次作成については未だ途上にある。ただし、逆にインターネット上に公開された情報等の収集などにより、いくつかの研究対象範囲を拡大し、いくつかの研究対象を新たに認識することとなった。

また、アルバイト動員等がやや困難な時期に、個人で映像資料や音声資料の規格統一と体系化を行い、どのような資料が残されているか、どのような資料に参着可能か、どのような資料を新たに収集する必要があるか、などについての計画をたてることが可能となった。大容量ハードディスクが容易に活用できるようになった状況をも利して、数千枚のディスクが映像データとして一望できることになったのはきわめて有効で、以下の成果は、それらの基礎的作業にもとづくものといえることができる。

具体的な成果としては、従来の各演劇メディアでの知見を総合集大成する形で、新発見の「林又一郎旧蔵フィルム」の詳細を解明し、学会および国立映画アーカイブでの上映会に際して、広く一般に成果を還元したことが、まず挙げられる。これは新たに発見されて国立映画アーカイブに寄贈された映像群の、内容調査を依頼されたことに始まるが、昭和初年の上方歌舞伎の舞台と、初代中村鴈治郎周辺のプライベート映像を含む、貴重な映像資料であることが明らかとなった。舞台映像としては、従来知られていた「初代中村鴈治郎舞台のおもかげ」の原版にあたるフィルムを数多く含むとともに、まったく未知の舞台映像が新たに多数出現したこととなる。十五代目市村羽左衛門・六代目尾上梅幸の「かさね」や、六代目尾上菊五郎の「鏡獅子」の、これまでにない映像の出現は、上方歌舞伎のみならず、当時の歌舞伎界全般を考える上でも、きわめて重要な資料の発見といえる。また、初代鴈治郎のプライベート映像では、後援会の余興のありさまもさることながら、初代鴈治郎の葬儀の映像が質量ともに圧巻で、風俗的にも社会史的にも、もちろん演劇史的にも、きわめて興味深い資料が出現したこととなる。本映像によって、初めて「動

く姿」が確認された演劇史上の著名人物も少なくない。以上のような成果は、演劇雑誌や演劇写真の膨大な蓄積によって、どれが誰であるかの同定作業を経た上の研究成果であり、フィルムに撮影された舞台の様子からは、演目や演出のみならず、俳優その人に関わる要素も髣髴とさせるところが少なからずあった。国立映画アーカイブでの上映会を2回、歌舞伎学会での公開と、日本演劇学会での関西公開と、都合4度の上映と実況解説を重ねて、これらの研究成果を一般に還元する機会を得た。

雑誌資料については、これまで研究の及んでいない横長のグラフ誌、『演芸』『演藝写真』『演藝写真帖』などの新たな出現を見て、これにより、絵はがきなどとの連動についての知見を深めることを得た。横長のグラフ誌は、管見の限りでは海外に類例がなく、日本国内に数例を知る。判型の比較のみならず、綴じ方、開き方にも、雑誌の比較要素があることを再認識することができるが、横長の判型は、演劇絵はがき（舞台面を撮したものは、縦より横が圧倒的に多い）や、報道写真（ニュース速報的な特報版などがあった）などとの連動が容易であるという点で、演劇雑誌にとっては注目される点となるだろう。

絵はがきについては、判型の上でこれまで知られていない形状（複数をつないだパノラマ式画面とも称すべき舞台面写真）などを新たに発掘したほか、これまで存在の知られていない劇場表の絵はがきなどを新たに発掘した。劇場写真については、絵はがきだけでなく、報道写真その他を総合する必要があるが、地方史研究などとも連携した総合的な調査が必要と思われる。地方の演劇史にかんする調査・研究が、近年少しずつ公刊されてきており、いずれそれらを統合した研究が必要と思われるが、その際、各劇場の写真は、各地域の番付資料などとともに、その根幹をなすものと認識することができる。

音源資料に関しては、海外演劇の古録音の音源収集に着手することによって、日本における芸能音源資料との比較研究への足がかりを築いた。SPレコード時代のシェイクスピア劇の録音は、従来あまり関心を払われてこなかったが、2023年にパリのプティ・パレで開催されたサラ・ベルナルの大回顧展が、映像や音声にも大きな関心を割いていることなどから、ようやく活用が緒に就きはじめた観がある。すでに、日本の芸能音源資料については、これまでも様々な形で発掘・整理・活用をおこなってきたところであるが、同時代の海外の録音資料との比較を通して、せりふ術や記録することそのものへの意識の差など、様々な要素をうかがうことができるものと思われる。

過去における記録と並行して、現在もおこなわれている英語歌舞伎の上演に参画する機会をえて、これによって、様々な知見と、今後への展望も得ることとなった。ポートランド州立大学における英語歌舞伎の上演と、日本への引っ越し上演に協力することで、異文化交流における演劇の力を再発見することとなったが、ポートランド州立大学の英語歌舞伎は、いわば手作りの見よう見まねの素人性が魅力ともいえるのに対して、そうした素人性とは異なる地点にある英語歌舞伎の存在を知ることができた。

ひとつは日系人収容所内における日本芸能の一環としての歌舞伎上演で、ロサンゼルスの日系人博物館との連携によって、画像資料や映像資料の紹介を受けて、それらを調査する機会を得た。いまひとつは、ハワイ大学における歌舞伎上演の蓄積で、これは1924年以来、実に100年近い歴史を刻んでいることを再認識するとともに、その長く貴重な歴史を紹介する日本側の文献がほとんどないことにも気づかされた。この点についても、ハワイ大学との連携によって、資料所在および通史的な見通しについての知見を共有しつつある。

以上のような、いわば「在外歌舞伎」は、そのありようは決して一様ではなく、それぞれの地域に根ざし、それぞれの環境や人脈によって、それぞれの形で歴史を刻んでいる。在外の日本古典芸能という点では、能の事例が広く知られているが、お稽古事として素人への教授をおこなうのが常である能とは異なり、歌舞伎の場合はお稽古事としての素人への伝授形式は確立されていないため、事例ごとの歴史調査や環境調査をおこなわなくては、その事例を捉えることができないということも改めて認識させられることとなった。いわば、文化研究と地域研究と芸術研究とが交錯する沃野としての新たな研究領域を認識したともいいうことで、今後の研究課題としてゆきたい。在外歌舞伎については、それを専門とする演劇雑誌の存在はないが、新聞資料が大きな資料源となっているほか、写真、映像、音声、周辺資料など、これまで推進してきた従来の演劇メディア研究の方法と蓄積が大いに活用できる領域であることも、いうまでもない。

以上のような、様々な事例に関する個々の研究成果を総合するような形で、たとえば楽劇学会例会においては、シンポジウム「楽劇関係の雑誌をめぐる」に参加、その成果を活性化することを得た。また、演劇研究における絵画や写真資料、映像資料の活用については、コロナ禍にあることを逆に利して、海外とのオンライン対談等に関わることで、海外における事情との比較等に関する知見を深める機会を得たことも挙げられる。「演劇の映像配信をめぐる一松竹・NTライブの事例から」と題したオンラインシンポジウムでは、イギリスのナショナルシアターと、日本の松竹との対話を通して、彼我の環境差と、それぞれが取り組み得る課題についての知見を得たが、コロナ禍によって飛躍的に進展した演劇の映像配信が、今後どのような形を取っていくか英国との対話を通して知見を深めたこと、などが挙げられる。また、「歌舞伎とシェイクスピア上演の過去・現在・未来」と題して、バーミンガム大学シェイクスピア研究所のティファニー・スタン教授と日英オンライン対談を開催、インターネット上に公開することができた。第一回目となる今回は、主に絵画資料にもとづく上演復元の方法をめぐる対談をおこない、劇場の環境や俳優の演技にまで及んだが、日英での事情の相違よりも、はからずも時と所を隔てて一致して

いる点が多いところが意外な収穫で、今後の継続を約して第一回を終了した。今回は、絵画資料といっても前近代のものが中心となったが、もし回数を重ねていくことができれば、比較研究という点では未踏の分野である写真資料その他にも、議論が及んでいくことも期待できる。

このほか、現在の演劇雑誌、その他のメディアをくまなく探訪した上での成果として、雑誌『演劇界』にコロナ禍以来連載を続けていた「劇界の動向」が挙げられる。後世どのような形でコロナ禍が振り返られるにもせよ、渦中であって、客観的にみることができない状況下で、劇界とその周辺がどのように右往左往していたかをリアルタイムで記録することをめざしていたものである。残念ながら雑誌『演劇界』が休刊してしまったため、有志とともに雑誌『劇評』を創刊して、その中で連載を続ける形で、記録を継続した。

また、依頼原稿ではあるが、国立劇場閉館にあたって、国立劇場での文楽公演の歴史を振り返る連載を4回にわたって、文楽公演筋書に掲載した。いずれも、筋書、公演評、写真資料、音声資料、映像資料などをくまなく探査した上での歴史叙述であるので、演劇メディアの調査研究と、その成果をいかに応用してゆくかの実践例と位置づけることも可能である。演劇の歴史の叙述は、文学や絵画とは異なり、後世がその作品に参着することがきわめて困難であるが、国立劇場は開場以来の自主公演を継続的に音声・映像によって記録し続けており、事後的に、二次的にではあるが、どのような資料をみることによって、どのような演劇史を追体験することが可能であるかといった点にも配慮しながら、叙述を進めたという点で、本研究にもとづく成果と体験を実践的に活かした事例ということも可能かと思われる。

以上のように、コロナ禍の影響によって実地調査その他は大きく制限を受ける期間の研究となったが、今後さらに探究すべき分野の開拓を含めて、演劇と種々のメディアをめぐる研究領域を深化させることを得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 1
2. 論文標題 新派から映画へ その前提として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『新派映画の系譜学』（森話社）	6. 最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 5
2. 論文標題 初代国立劇場の文楽公演 / 第一回 通し上演という理念	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立劇場文楽12月公演筋書	6. 最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 1
2. 論文標題 初代国立劇場の文楽公演 / 第二回 明治生まれの芸芸員の退場	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国立劇場文楽2月公演筋書	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 10月号
2. 論文標題 芸談を考察する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 演劇界	6. 最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 10月臨時増刊
2. 論文標題 須永朝彦と演劇 坂東玉三郎、そして郡司正勝	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 218-228
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 45号
2. 論文標題 「新富座妖怪引幕」の来歴をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 演劇研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 楽劇関係の雑誌をめぐって
3. 学会等名 楽劇学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 Shakespeare and Kabuki : fragmentation and visualization
3. 学会等名 国際シェイクスピア学会「FOUND IN TRANSLATION」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 現代演劇と「桜姫東文章」
3. 学会等名 早稲田大学演劇映像学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 児玉竜一、窪寺祐司、河合祥一郎ほか
2. 発表標題 演劇の映像配信をめぐる 松竹・NTライブの事例から
3. 学会等名 早稲田大学演劇映像学連携研究拠点オンライン・シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 林又一郎旧蔵フィルム解説
3. 学会等名 歌舞伎学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 児玉竜一ほか
2. 発表標題 コロナ禍における研究機関の取り組み
3. 学会等名 楽劇学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 日中の古典演劇 歌舞伎と京劇を中心に
3. 学会等名 北京外国語大学（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 児玉竜一ほか
2. 発表標題 河竹黙阿弥の明治 歴史の転換期における歌舞伎の変容
3. 学会等名 日本演劇学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 演劇と歴史 如何にして資料から、上演を復元するか
3. 学会等名 ブリュッセル自由大学ワークショップ
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 児玉竜一ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 早稲田大学演劇博物館	5. 総ページ数 144
3. 書名 図録『新派 SHIMPA』	

1. 著者名 児玉竜一ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 早稲田大学演劇博物館	5. 総ページ数 317
3. 書名 図録『ロスト・イン・パンデミック』	

1. 著者名 児玉竜一ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 早稲田大学演劇博物館	5. 総ページ数 227
3. 書名 図録『没後130年 河竹黙阿弥 江戸から東京へ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>日英対談「歌舞伎とシェイクスピア上演の過去・現在・未来」と題して、バーミンガム大学シェイクスピア研究所のティファニー・スタン教授とオンライン対談を行い、オンライン公開した（2023年）</p> <p>国立映画アーカイブから招待講演の依頼を受けて、講演「歌舞伎役者としての澤村四郎五郎」を行った（2023年）</p> <p>国立映画アーカイブから招待講演の依頼を受けて、実況解説「林又一郎フィルム」として、無声映画上映に対する実況解説を2回行った（2022年）</p> <p>板倉聖哲、伊達なつめ、後藤隆基とともに、「コロナ禍の3年間 演劇・ミュージアム・社会」と題してシンポジウムを開催、報告書に掲載・刊行した（2023年）</p> <p>犬丸治、北村紗衣、トーヴェ・ビュールク、日置貴之とともに、「SNS時代の歌舞伎研究と批評」と題する座談会をおこない、『歌舞伎研究と批評』67号（218-228p）に掲載した。</p> <p>中村哲郎と「戦後歌舞伎と近現代演劇」と題する対談をおこない、『歌舞伎研究と批評』68号（5-29p）に掲載した。</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------